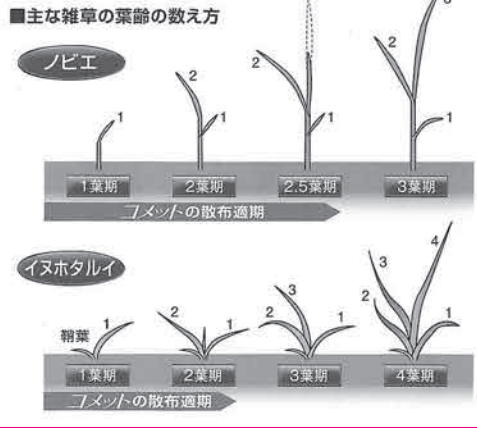


栽培ポイントをチエツク

水稲用除草剤の効果を発揮させるために大切なこと

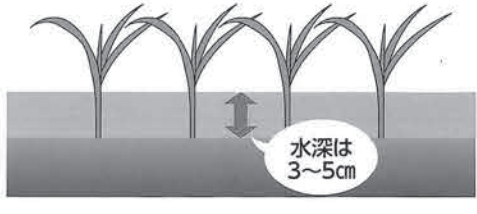
① 雑草の葉齢に気をつけ、散布適期を逃さない

除草剤は防除適期の葉齢を逃してしまうと効果が低下します。雑草の葉齢には十分注意しましょう。



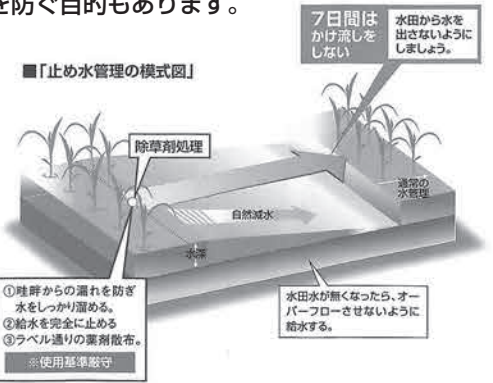
② 散布時の水深は3～5cmを保つ (ジャンボ剤は5cm以上)

十分な湛水状態にすることで、有効成分が均一に拡散し、効果が高まります。



③ 除草剤散布後は7日間入水、落水をしない

薬剤の成分を水田にとどめておくことで、安定した効果を得ることができます。また、河川などに除草剤の成分が流れ込むことを防ぐ目的もあります。



出典：公益財団法人 日本植物調節剤研究協会「平成24年度 水稲用除草剤適正使用キャンペーン」

青森県が誇るブランド米「青天の霹靂」。米食味ランキングでは、4年連続最高評価の「特A」を獲得し、当JA管内においても作付け3年目を迎えた。

最近では、全国的に新品種が次々とデビューしているのに加え、「特A」米の産地も増えており、産地間競争が激しさを増している。産

地間競争に打ち勝つためには、消費者を裏切らない良食味で高品質な生産を維持しなければならぬことから、品質にばらつきが生じないように水管理などの技術力向上が一層求められている。品質や食味の向上と安定した収量の確保に向けて、今回は基本的な栽培のポイントを振り返ってみたい。

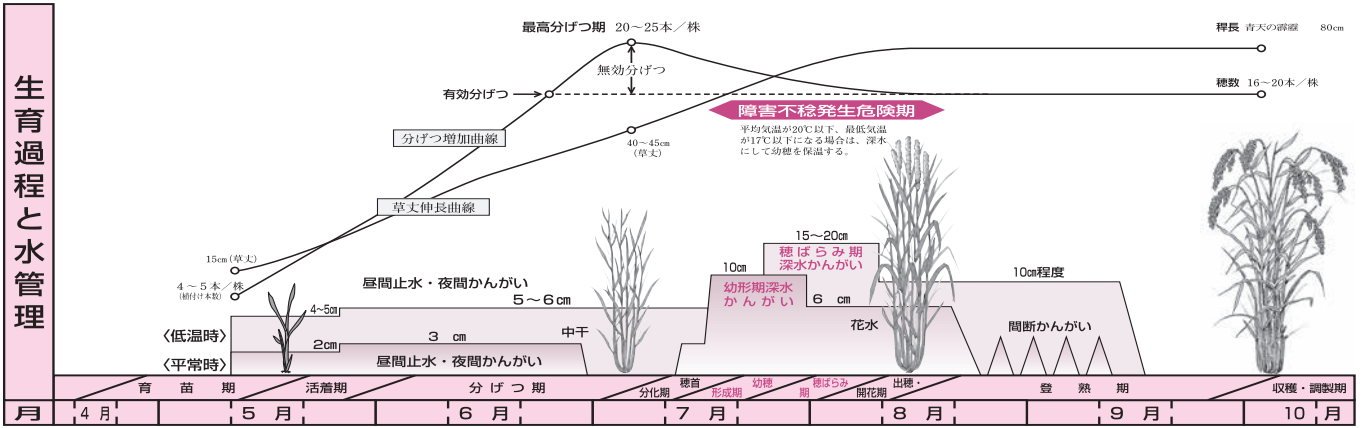
初期の雑草防除について 水稲用除草剤を上手に効かせよう

「青天の霹靂」の栽培要領において、農薬成分は10成分までが限度となっており、カメムシ防除の実施にあたって中干し時期の「バサグラン」又は「クリンチャー」は使用できないことから、初期防

除を徹底することが重要である。

当JAで取り扱っている水稲用除草剤「プロメット」については、移植5日後から散布する。除草剤散布時は5cm以上の深水とし、水田全体に広がるように散布していただきたい。また、散布後は7日間入水・落水は行わないようにする。しかし、田面が見えるような



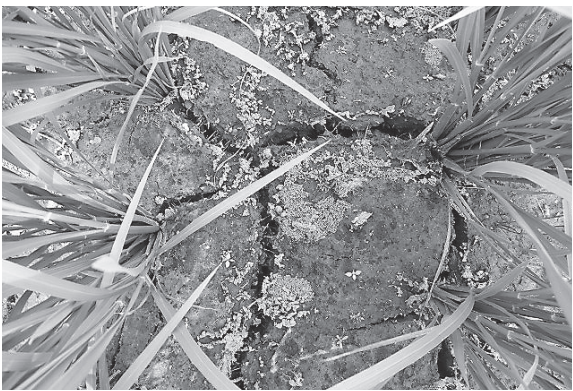


中干しの程度目安

場合は、除草剤の処理層が壊れないよう静かに水を足すなどして改善する。どうしても水が抜ける水田については、畦塗りの実施などを行い、減水軽減に努めなければならない。

水管理について
適正な水管理で生育促進を図る

活着期後は、分げつ期に入ることから水深を3cm程度とし、分げつ発生を促進させよう。また、寒い日は水深を5〜6cm程度として保温に努め、早期に茎数が確保できるようにする。茎数が確保できたら中干しを行う。(中干し参照)



中干しのやり過ぎ (ひび割れ大)

幼穂形成期からは十分な水量が必要な時期となることから、10cm程度で10日間深水にして低温から幼穂を守らなければならない。幼穂形成期を終えると穂ばらみ期に入り、平均気温が20℃以下となる場合には15cm以上の深水で管理し、幼穂の保温に努める。高温時には4cm程度の水深とし、高温が続く場合には、時々水の入れ替えを行って根の老化防止に取り組み。

出穂後10日間は最も水を必要とすることから、5〜6cmの水管理を行う。平均気温が20℃以下の低温が続く場合には、10cm程度の深水とし、開花・受精の促進に努める。

登熟期は水をあまり必要としない時期であり、根の機能を低下させないことに主眼をおいた水管理が必要である。高温で推移する場合には2〜3cmの浅水とし、時々水の入れ替えを行って根の老化防止に努める。低温時は10cm程度の深水で管理し、登熟の促進に努める。落水はコンバイン作業を考慮し、水田に合った時期に行う。落水が早すぎると肥大が抑えられ、屑米の増加や胴割米の発生など品質低下に繋がるので注意しよう。

中干しについて
根に酸素を供給して活力を高める

1株茎数が18本程度確保できたら中干しを行う。目的は、窒素の過剰発現抑制や無効分げつの抑制、土壌中への酸素の供給、秋作業を容易にするなどが挙げられる。中干しは田面に軽く亀裂が入る程度とし、実施時期の目安は7月上旬から7月中旬頃だが、この時期に低温であったり、生育が遅れていて穂数が足りない場合は、障害不稔や生育遅延を助長する原因となるので行わないようにする。また、幼穂形成期までには必ず終了する。